

初産おめでとう！「ササキサン」

2010年シーズン尻別イトウ採卵会レポート
文・沼田雄一(オビラメの会)



尻別川の未来を考える
オビラメの会

OBIRAME RESTORATION GROUP NEWSLETTER Jun. 2010

34

PHOTO / Hirata Tsuyoshi

5月16日(日)。晴れ。この4月から倶知安町民となり、今日は「地元組」として迎える初の採卵会。気合いを入れて早朝から作業のお手伝いを……と思いましたが、職場の同僚を案内する都合上、午前10時の開始時刻に間に合うように池に向かう。同僚は3人で、うち2人はお子さん連れ。子どもたちが自分より大きな魚にどんな反応を示すか、楽しみである。

現場に到着した頃には池の水抜き作業もほぼ終了していて、そろそろ5匹のイトウを捕獲し水槽に移す作業が始まるところだった。いつものように吉岡事務局長とニセコファインの社員の方々が本業をお休みにしてテキパキと作業にあたっている。札幌組より遅れた自分としては、後ろめたさ倍増で

ある。水産試験場の川村さんの到着まで、久しぶりにお会いする方々としぼし世間話。子どもたちも思い思いに楽しんでいるようで、ひとまず安心。

川村さんが到着し、いよいよ採卵スタート。イトウを1匹ずつ大きなタライ(といってもイトウは斜めにしか入らないが)に移して麻酔をかけ、体重や体長を測る。子どもたちはタライの端に手を掛け身を乗り出すようにしてイトウを見ている。ササキサンが抱卵していることが判明し、一同どよめく。測定後、他の雌3匹は先に池に戻された。そして、いよいよ採卵である。川村さんがササキサンのお腹をしごく薄いオレンジ色のきれいな卵が次々と飛び出し、再び周囲がどよめく。続いてチビの出番——ところが、出

ない……。何度しごいても精子はほとんど出ず、川村さんの話では受精はかなり厳しいとのこと。

ともあれ、3年ぶりの採卵成功は素直に嬉しい。もちろん、池の管理やエサやりなど、本業の傍ら日々作業にあたられた方々の努力のたまものである。稚魚誕生は神頼みとなったが、楽しそうな子どもたちを見守るおじさん会員たちのやさしい眼差しが印象に残る採卵会だった。

採卵結果①(2010年5月16日)
総卵数 5800粒

採卵結果②(2010年6月14日)
発眼卵数 430粒
発眼率 7.4%(430/5800)

12年間で苦労様 親魚たち放流へ

ありがとう、チビ・チョースケ・キンチャン・ノリカ・ササキサン

「オビラメの会」は、飼育している尻別川産イトウのうち、これまで倶知安町内の施設で畜養してきた親魚5個体を、近く生まれ故郷の尻別川に戻すことを決めました。最古参で、何度も人工授精を成功させてきた「チビ」(1998年に尻別川で捕獲、雄)をはじめ、当会の「オビラメ復活30年計画」の進展に大いに貢献してくれたイトウたちです。

長く飼育を担当してきた吉岡俊彦事務局長は、「すべて尻別川から連れてきた野

生イトウたちで、生き餌しか食べないなど、飼育は苦労の連続でしたが、オビラメの会が尻別イトウの遺伝子を確保できたのもこのイトウたちのお陰。ありがとう、長い間ごろうさまと感謝を込めて、尻別川に戻してやりたい」と話しています。

当会は今後、飼育施設を集約し、「デカ」「ノリカ」「ササキサン」の子どもたちを次の親魚候補として育てていく方針です。



PHOTO / Sakata Jun-ichi

親魚たちのプロフィール

番号	愛称	性別	尾叉長	体重	由来	人工授精
B	チビ	♂	91.0cm	9.10kg	尻別川本流で捕獲	2003年、04年、07年、10年精子提供
F	キンチャン	♀	74.0cm	6.40kg	尻別川本流で捕獲	
I	チョースケ	♀	91.0cm	12.8kg	倶知安町内で飼育されていた個体	
J	ノリカ	♀	98.0cm	11.5kg	尻別川本流で捕獲	2007年採卵
P	ササキサン	♀	99.0cm	13.1kg	尻別川本流で捕獲	2010年採卵

測定値は2010年5月16日現在

オビラメの会 尻別川産イトウ飼育年表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
1998年 9月13日	○	○	○	○	○											
9月20日			×	×	×											
1999年 夏						○										
12月5日							○									
2000年 7月						キンチャン		○	○							
10月	ヌシ							×								
11月4日																
11月19日																
2001年 3月7日													○			
3月10日																
4月16日		チビ											×			
5月15日	×															
5月17日							×									
11月29日									チョースケ	ノリカ						
2003年 5月7日																
11月18日														デカ		ササキサン
2005年 6月9日														×		
2006年 3月5日																○
2009年 1月															×	
5月8日																
2010年 5月15日																
6月		放流				放流			放流	放流						放流

俱登山川第5号落差工魚道 その特徴と見どころ

文と写真 岩瀬晴夫



いわせはるお
オビラメの会会員、北
海道技術コンサルタ
ント・川づくり計画室長
PHOTO / Hirata Tsuyoshi

「オビラメの会」がイトウ再導入実験を進めている俱登山川の流域で、クトサン3号川に設けられている農業用落差工(落差1m)に2010年2月、新しい魚道が完成しました。「第5号落差工魚道」という名称ですが、本事業の対象となる俱登山川とその支川であるクトサン3号川の2河川にある合わせて5基のうち、5番目に当たる落差工の魚道、という意味です。

さて通常、既設落差工につける魚道は、落差のあるところから前出しとする(下流へ出す)か、引込みとする(上流へ引く)かを選択してから、設計を始めます。当該地の落差工の場合、上流側の川幅は2mと狭いのに対し、下流側は広いプール断面となっています。そこで通常は、広いほうの断面に設ける「前出し魚道」を選ぶのがセオリーです。工事を担当した後志支庁が当初示した提案も、前出し魚道でした。

しかし、「オビラメの会」は、落差直下の広くて深いコンクリート製プール(人工淵)を、そのまま水生生物のために活かしたいと考えて、俱登山川本流の2～3号落差工で採用して成功した「引き込み魚道」を要望しました。こちらの方が施工費も抑制できます。そして協議の結果、引込み魚道が採用されました。

「オビラメの会」としては、コンクリートの使用はできるだけ避けたいところですが、構造力学上の制約はいかんともしがたく、U字型の掘り込み鉄筋コンクリートを使った現場打ち水路となりました。平滑なままだと水生生物が遡上しにくいと考えて、水路の底と側壁(エキスパンドメタル

張り)に玉石を張り付けた斜路式玉石張り魚道としています。

平水時に魚類が利用できる通水幅は0.5m程度の狭いものです(川幅は2mありますが、コンクリートの側壁厚と石張り厚によって狭められて、通水幅は0.5mになるのです)。工事は生物に配慮して、魚類などがほとんど移動しなくなる厳冬期に行なわれましたが、寒風と積雪のなか、1月に実施された「オビラメの会」の工事見学会では、施工空間の狭さを実感された会員も多いと思います。

狭い川幅に設ける魚道は、少しの増水でもすぐに満杯になります。すると、いわゆる「落下水脈の流れ」が生じて、魚類が遡上できない急流になってしまう可能性があります。そこで、遡上障害とならないように注意しながら、魚道内に大石を配置し、その大石の周囲にいつも流速の低い部分が生じるように工夫してあります。

平水時の流れの時にも、アメマス・ウグイ・ハナカジカといった魚類は、この低流速ルートを利用して川を遡上することでしょう。これまで落差工を越えて移動できなかった魚類たちがどのように分布を拡大していくのか、魚道設置後の上流の環境変化をモニタリングすることが大切になります。

俱登山川流域の新しい魚道の周辺では、独立行政法人土木研究所自然共生研究センター(岐阜県各務原市)の永山滋也専門研究員が、「オビラメの会」と協働でモニタリング調査を実施しています。



魚道工事前の俱登山第5号落差工(2010年1月13日)



完成して初めての融雪増水期を迎えた第5号落差工魚道。本堤の直上流の右岸底部に置かれた大石(直径50センチ、ポールの右上)あたりの流速が1.9m/s程度で、これならイトウを含む遊泳魚は大石を回りこんで遡上可能です。(2010年4月16日)



俱登山川落差工位置図

尻別川モニタリング報告

オビラメの会モニタリングチーム・リーダー **大光明宏武**



PHOTOS / Hirata Tsuyoshi

1 産卵期潜水調査

「オビラメの会」が、俱登山川水系のX川とY川をイトウ再導入河川に選び、初めて人工孵化稚魚を放流してから、2009年秋で丸5年が経ちました。放流魚たちが順調に育っていれば、成長の早い個体なら、そろそろ繁殖のために母川回帰してきてもよい頃合いです。そこで2009年春の繁殖期に合わせて、俱登山川で潜水調査を行いました。



ドライスーツ姿で川底のようすを調べる大光明さん

調査したのは、4月下旬から5月中旬にかけての期間です。融雪増水が落ち着いて、川の水かさが下がり始めるちょうどこの時期に、イトウ親魚たちは繁殖地を目指して遡上してくるからです。遡上時期は川の水温にも関係していると考えられるので、俱登山川には水温変化を自動的に記録する装置を設置して観測を続けています。

残念ながら、2009年のこの時期には、遡

上親魚を確認することも、産卵床を確認することも出来ませんでした。引き続き2010年度も観察を続ける計画です。

2 X川でのイトウ生息調査

X川では、オビラメの会が初めてイトウ稚魚を放流した2004年秋以降、毎年7・9・11月に定期的なモニタリング調査を実施しています。全ての放流魚に、放流時期ごとに形を変えて標識してあるので、採捕した魚を調べれば、いつどの川に放流したイトウかが分かります。

イトウ稚魚は成長するにつれて下流域に分散する傾向がありますが、X川を調べてみると、満5歳になってもなお放流河川内に留まっている個体があります。09年現在、放流イトウは満5歳(04年生まれ)と満2歳(07年生まれ)の2世代がいますが、X川に残留している04年産と07年産の満2歳時の体サイズを比較すると、07年産のほうが大型の傾向があります。

個体数の推移から、07年生まれのイトウたちは、04年生まれたちに比べて短い期間のうちに下流域に分散していったことが分かっています。X川に残ったグループも、07年生まれのほうが個体密度が低い状態で成長したと考えられます。密度が低いと、餌や居場所をめぐる競合が少ないと考えられ、それが成長の早さにつながった可能性があります。

このX川は、直線化された2面護岸の部分が続いているのですが、幸い水

深があり、ところどころで岸から延びてきた草本など水面をカバーしていて、意図せず生息環境が生まれています。

3 放流に適した河川はどこに？

オビラメの会は、この俱登山川流域での実験結果を生かして、尻別川流域の他のエリアにもイトウ繁殖環境を再生していくことを目指しています。そこで、俱登山川に続く再導入河川を選定するために、候補河川の環境を調査しました。

調査したのは、あらかじめ会員が手分けして下調べしておいた支流で、今シーズンは合わせて15河川を調べました。産卵環境および稚魚の生息・越冬環境をメインのチェックポイントとして、調査しました。

その結果、最高点を取ったのはZ川でしたが、それでも100点満点で45点の評価でした。次点のV川は33点。この川では全川を踏査して環境を調べたほか、約300mの範囲で魚類調査も行ないましたが、その短い区間だけで外来種ニジマス10匹以上確認しました。もしここにイトウ稚魚を放流すれば、簡単に彼らの餌食になってしまうでしょう。このほか稚魚期の餌と生息環境をめぐる競合や、産卵期の産卵床の掘り返し、さらにニジマスとイトウのペアリング(異種間交雑)の可能性も含めて、評価は低めにしました。

なかなか困難な課題ですが、引き続き調査を続けて、尻別イトウの復活に最も効果的な方法を見きわめていきたいと思っています。

(2010年1月23日「オビラメ勉強会」での報告発表から)

当会のイトウ保護活動に助成金

パタゴニアフットウェア「1% for the planet」プログラムから

patagonia
footwear

パタゴニアフットウェア(東京)は、2010年5月、環境保護団体への助成プログラム「1% for the planet」にもとづき、「オビラメの会」への助成を決定しました。2009年度に続いて2年連続の助成です。NGOとして、会員や支援企業による物心両面のサポートによって活動を続けている「オビラメの会」にとって、このうえないプレゼント。吉岡俊彦事務局長は「本当にありがたいご支援です。おかげでイトウ飼育や、放流魚のモニタリングなど、必要なプロジェクトを安心して続けることができます」と話しています。

パタゴニアフットウェア、諸越宏之さんからのメッセージ

オビラメの会の皆さま

パタゴニアフットウェアの諸越と申します。

日頃の皆さまの活動のご努力に深く感謝の意を表します。

私たちのおかれている都市生活の中では、自然(私たちの生活環境)について感じ、考え、思い、そして将来に向け行動を起こすことがなかなか出来ていないのが実情です。

今この時にも私たち人間が引き起こす環境破壊により色々な問題を引き起こし、一方では、その環境を守る、その再生のために大変なご努力をされている方々が、大勢いらっしゃると思うと、人間の愚かさを感じざるを得ません。

被害を受け、そこに生息する生物にまでも影響が……。絶滅寸前となったイトウを救う為に活動されている皆さまの思いやその活動を私たちもしっかり共有し環境に対して取り組まなければならないと、改めて感じております。

皆さまのご活動が継続して順調に進みますよう、遠方からではございますが応援しております。

2010年度通常総会のご案内

タダイマ
更新手続き中

とき 2010年6月26日(土曜日)午後3時
ところ ニセコ町民センター
北海道虻田郡ニセコ町富士見
おといあわせ オビラメの会事務局
☎0136-44-2472
URL <http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」

当日、新年度会費を承ります。「南限のイトウ」保護活動のために、どうぞ引き続き正会員としてサポートをお願いいたします。

標識オビラメ見つけたら
☎0136-44-2472
オビラメ事務局マデ

オビラメの会ニューズレター 第34号(2010年6月発行)
OBIRAME Newsletter No.34 June 2010
■発行 ■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
■編集 ■ 平田剛士
■印刷 ■ (株)須田製版 (北海道滝川市栄町3-5-16)
■発送 ■ 吉岡俊彦
■郵便振替 ■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
■オビラメの会事務局■

北海道虻田郡ニセコ町富士見65「まぐろ屋十割」内
吉岡俊彦方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472
copyright 2001-2010 Obirame Restoration Group
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472
Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp